

---

# 水と風の二重奏

神崎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

水と風の二重奏

### 【Nコード】

N6838C

### 【作者名】

神崎

### 【あらすじ】

我々の周りに存在するものそれを見付けたとき人はさらなる進化をとげる  
ただそれは求め過ぎた力か持て余す力か

## プロローグ（前書き）

はじめまして神崎です。

この度はアクセスしていただきありがとうございます。

この作品は処女作なのでうまく書けているかわかりませんが楽しんでいただけたら幸いです。

それではお楽しみください。 m ( — ) ( m

## ブローグ

叩かれたと思ったときにはもう遅かった。

パーンと乾いた音が部屋に響く。

そして、同時に頬に鋭い痛みと熱があらわれる。

『また、叩かれてしまったな』と、冷静ながら考える。

そして、叩かれた右頬をなでながら、叩いた本人を見つめて

「ごめん、美夜<sup>ミヨ</sup>」

と、つぶやいた。

「和人<sup>カスト</sup>…あやまるなら…最初から…あんなこと…し…ない…で…よ。」

俺の言葉に対して、泣きながら、美夜は訴えるように言った。

目を赤くして、叩いたであろう手を胸に抱え泣いている彼女をみて、胸が痛んだ。

心配してくれている。

それがよくわかる。

だから、俺は、彼女に近づき、やさしく、やさしく抱きしめる。

それが、今俺にできる事だから

俺のせいで、いつも美夜に心配をかけて、叩きたくないのに叩かせてしまう

俺が『覚醒』してないから

俺がいつまでも無能のままだから

だから

いつも制服はボロボロで

だから

美夜はいつも心配して

だから

俺は自分のふがいなさについて

だから

俺は自分を怨むようになって

だから

だから

だから

俺は

力が

欲しかった

俺は

覚醒が

したかった

俺は

彼女を

守りたかった

いつも守り、支えてくれる彼女を

今度は

俺が守りたい

そして

その願いは

その思いは

ある日

俺の

覚醒により

叶った

## プロローグ2（前書き）

初めて書く作品なので、誤字などがあるかもしれません。もし、ありましたら教えてください。あと良ければ感想をよろしく願います。 m ( ) m



## プロローグ2

あれは、中学二年の時だったと思う…

夏休みも終わり二学期始めの登校日…

まだ残暑が続く中、前日に焦ってやった宿題をもって登校した…

普通はこれから教室に行ってひさしぶりに皆と雑談とか楽しむはずなのだが今年はなぜか違った…

教室のドアを空けた瞬間違和感に気づいた。

なぜなら話し声が聞こえないからだ。

普通なら雑談とかで盛り上がっている教室で誰も口をひらかずただただ何かを待っているかのように椅子に座り、佇んでいた。

そんな雰囲気を押されながらも、自分の席につく。

そして、事情がわからない俺は近くにいた友達に話しかけた。

「なあなあ、なんかあったのか？皆静かだけどさ」

「お、お前、何にも知らないのか？」

なぜか怯えたよう話す友達

その口調の感じにますますわけがわからなくなる

「ん？しらねえ。だから聞いてんじゃん。」

俺の軽い感じに本当に何も知らないと感じた友達は、はあ、とため息をつくとゆっくりと言葉をはいた。

「あのな、今日、これから俺らは検査される　そして、その検査で『当たったら』　連れていかれんだってよ。　あのSF研究所に」

聞いた瞬間、冗談かと思った。

検査が何か、わからなかったがSF研究所は、何か知っていた…

『SF研究所』

そこは、能力者が集まる所

そこは、能力者を育てる所

そつ、そこは、人ならざる者が集まる所

そして、

俺は

検査に

『当たった』

## 始まりの朝（前書き）

なかなかうまく書けない第三話

始まります。

## 始まりの朝

目覚ましの無機質な音が身体を覚醒させる

そして、ゆっくりと目を開ける・・・

だが目を開けた先には何も無い

ただただ白い天井があるだけ・・・

好きなバンドのポスターなどあるはずもない・・・

周りを見渡してもこの部屋には生活臭を感じるものなどありはしない

あるのはベット、勉強机、本棚とタンス、そして、少しの日用品、私物なんてほとんどない

だって、ここは『牢獄』なのだから・・・

『牢獄』だなんてネーミング誰が考えたか忘れたが笑える。

確かにここは『牢獄』だ

なぜなら、ここは閉じ込めておく場所だからな『能力者』を

だから『牢獄』と言われるのも当然か・・・

体をパイプベツトから起こし、欠伸しながら体を伸ばす。

また、いつもの一日が始まる。

無機質で

何も意味がなく

生きることに

あきた

この

ツマラナイ

一日が

世界が

始まる。

ベツトから立ち上がり、パジャマ代わりのジャージを脱ぐ。

そして、タンスをあけ、着替える。

着替え終わり、玄関に向かう。

「さてと、アイツを起こしにいかますか。」

俺はいつもの日課をこなすため、部屋をでた。

まあ、こんな『牢獄』いや、『SF研究所』に連れて来られて、はや二年がたち。

俺は高校一年になった。

そして

ここから

物語は

動き出す。

何処からか声がする。

『私はここにいるから』

それは静かに響いた



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6838c/>

---

水と風の二重奏

2011年1月29日14時55分発行